

学位論文要旨

社会的情報処理モデルから見たいじめ加害者の認知
プロセス

広島大学大学院教育学研究科
学習開発専攻 学習開発基礎・支援分野

D112354 中村孝

本研究の目的は、加害予防・加害者支援という視点に立ち、社会的情報処理モデルの観点から、加害者の能力や認知のプロセスを明らかにすることであった。そのため、第1部では文献研究として、まず第2章で社会的情報処理モデルから見たいじめ加害者の特徴に関する研究を概観した。次に、第3章でこれまでのいじめ予防プログラムについて、社会的情報処理モデルのどの部分を成長させるかという視点と、加害者などどの立場に着目しているかという視点において検討した。これらを通して、いじめ加害者の社会的情報処理モデルから見た特徴を理解し、実際に行われているプログラムではそこにアプローチしているか検討することが第1部の目的であった。

次に、第2部では調査研究として、まず第4章でいじめ加害をしないための能力を測定する尺度を選定し信頼性を検討した。次に、第5章で加害者とそうでない児童の特徴の違いを検討した。そして第6章では、第1部で検討したいじめ予防プログラムを実施することで加害者の認知のプロセスに変化が見られるか検証した。最後に、これらの結果を踏まえて、第7章にていじめ加害者が加害行動に至るまでの認知のプロセスについて考察をまとめた。

第3章では、これまでの日本におけるいじめ予防プログラムを概観した結果、CiNii articles およびインターネットで「いじめ」「プログラム」のキーワード検索で該当した論文・本は151件あり、そのうち国内のプログラムを紹介しており、かつ統計的な検証を行っているものは12編であった。これら12編について、プログラムの対象となるいじめの立場・SIPモデルの観点で整理した結果、傍観者に焦点を当てたプログラムが6件、被害者と加害者に焦点を当てたプログラムは5件であった。SIPモデルの観点では、Step4の方法案の検索に焦点を当てたものが9件と多く、プロセスに関連がありそうなものは2編と少なかった。

第4章では、SIPの観点から先行研究の尺度を選択し、いじめ加害をしないために必要な能力(Ability for Preventing Bullying: 以降 APB)を測ることとした。その結果、クロンバッハのアルファ係数による信頼性($\alpha = .70 \sim .82$)と、多次元尺度構成法による各尺度の独立性が確認された。

第5章では、いじめ加害者とそうでない者で APB の影響関係に違いがあるかを検討し、各加害行動に至るプロセスを検討することを目的として、各 APB の得点を説明変数、後続する APB の得点といじめ加害得点を従属変数とするパス解析を行った。その結果、非いじめ加害群では、全ての先行する APB から後続の APB へ正の有意なパスが確認された(図1)。一方で、いじめ加害群では、Step2 から Step3、Step3 から Step4 へのパスが有意ではなかった(図2)。また、非いじめ加害群では、Step5 から間接いじめ加害へ負の有意なパスが確認されたが、いじめ加害群では確認されなかった。これらのことから、いじめ加害者は Step2 から Step4 への繋がりが的確でなく、Step5 から間接いじめ加害への影響力も弱いことが明らかとなった。この結果は、相手の意図がわかっているにもかかわらず、仲良くなろうとは思わなかったり、相手と仲良くなりたいと思っても、その方法案が好ましくなかったり、相手がされたら不快に思うなどわかっているにもかかわらず、そのような状況があることが示唆された。

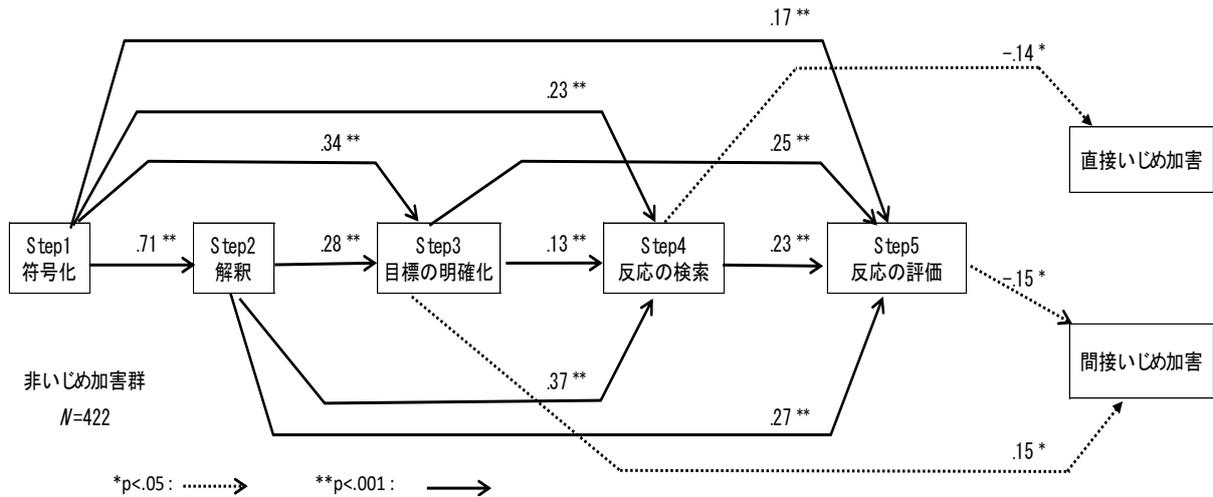


図 1 非いじめ加害群における APB のパス解析

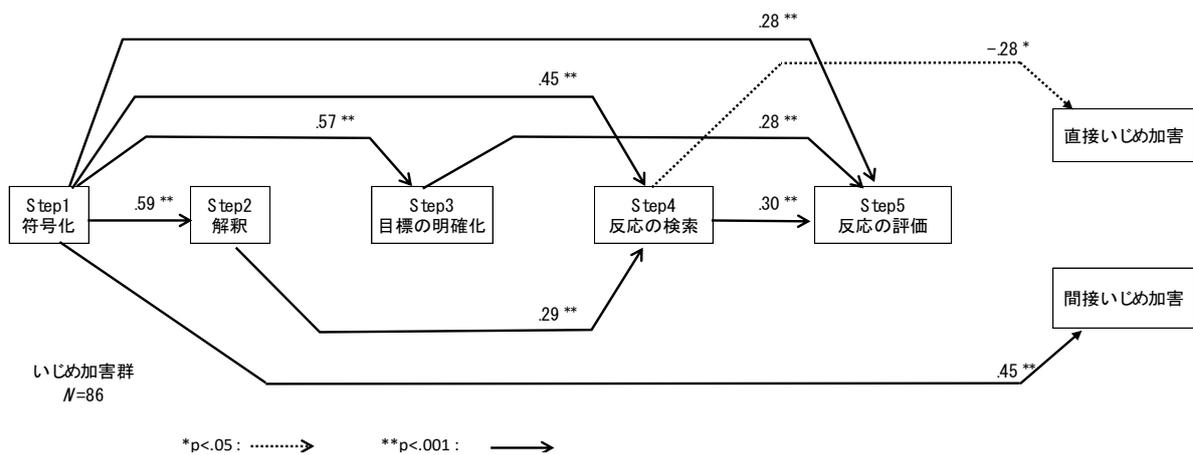


図 2 いじめ加害群における APB モデルのパス解析

第 6 章では、第 5 章で明らかとなったいじめ加害者における APB 間の繋がり の低さがプログラムの実施によって改善するか検討することを目的とした。プログラムは、第 2 章で吟味したプログラムの中から、加害者に焦点を当てており、なおかつ SIP モデルのプロセスにも着目している栗原(2013)を採用した。プログラムは 6 時間構成であった。公立小学校に在籍する 5, 6 年生 185 名を対象として、質問紙調査を実施した。その結果、プログラムの前後で、どちらの群においても APB の最初の Step である他者意識の得点が向上していた。このことから、本プログラムによって、他者に対して意識をするという SIP モデルでも最初の段階に位置する能力が向上することが明らかとなった。また、APB 間の繋がりが改善するか、検討した結果、プログラム前では見られなかった Step2 から Step3, Step4, Step5, へば正のパスと間接いじめ加害への負のパス, Step3 から Step4 への正のパスが確認された。この結果から、本プログラムの実施によって、いじめ加害の低減には至らないとしても、いじめ加害の低減に寄与すると考えられる APB 間の影響関係が改善されることが明らかとなった。この結果は、他者の行動や状況の解釈が上手にでき

るようになった児童は(2 視点取得), 相手との関係性を上手に結ぼうと目標設定をして(3 友人親和動機), よりよい方法案がないか検索し(4 向社会的スキル), 被害者や加害者がどうその方法案について感じるか情動的に共感でき(5 他者指向性)かつ, 陰口や仲間外しなどの間接ないじめはしないよう行動できるようになったことが示唆された。

第7章では, これまでの知見を統合し総合的に考察を4点まとめた。

まず1点目に, いじめ加害者の認知のプロセスについて考察をまとめた。先行研究の結果から, 直接いじめ加害者は SIP モデルの Step1,2,3,4 におけるいじめ加害をしないための能力(APB)が低いことが示唆されていた。今回の研究結果はこれを裏付けるものとなり, さらに Step5 の APB においても得点が低いことが明らかとなり, 直接いじめ加害をする児童は APB において全般的に課題があることが明らかとなった。さらにプロセスに着目すると, 直接いじめ加害へは, Step4 の APB が抑制する要因として働くことが示され, さらにその Step4 の APB へは Step1,2,3 の APB が影響を与えることが示唆された。しかし, いじめの加害者は, この中でも Step3 から Step4 の APB への影響が有意ではないことが確認された。これはつまり, 相手と仲良くなりたいというような目標を設定(3 友人親和動機)したとしても, 直接いじめ加害者は上手にその方法案を考えられない(4 向社会的スキル)状態であることが示唆される。このことから, 直接いじめ加害を抑止するために, 動機(Step3)に基づいた向社会的スキル(Step4)を高めるような支援が重要であると考えられる。一方, 間接いじめ加害者は先行研究の結果から, SIP モデルの Step3,5 の APB において得点が低いことが示唆されていた。今回の研究結果では, Step2,4,5 の APB において得点が低く, 一部先行研究を裏付ける結果となった。Step3 の APB において先行研究と異なる結果となった要因としては, 今回尋ねた Step3 の APB の項目は友人親和動機づけという, 対人関係目標に着目したためだと考えられる。つまり, 間接いじめ加害者も, 友人と仲良くしたいという動機が強いということである。さらにプロセスに着目すると, 間接いじめ加害へは, 非いじめ加害群においてのみ Step5 の APB が抑制因子として働くことが示唆された。また, この Step5 の APB に対しては, 非いじめ加害群では Step1,2,3,4 の APB から影響があるのに対し, いじめ加害群では Step2 の APB からの影響が確認されなかった。これらのことから, 間接いじめ加害を抑止するためには, Step5 と間接いじめ加害行動との関連付け, および Step2 から Step5 の APB への影響を強める支援が重要と考えられる。例えば, 誰かが自分の方を向いて笑っていた場合, その理由について色々な可能性や肯定的な可能性を考えられるようにし(2 視点取得), もし悪意があると捉えてしまっても自分が取ろうとしている反応をしたら自分や相手, 周りがよく思わないのではないか(5 他者指向性), そもそもその反応案が間接いじめになっていないかを振り返る練習をする, などである。

2点目に, いじめ加害者の認知のプロセスの可塑性について考察をまとめた。国内のいじめ予防プログラムを SIP モデルの観点から概観して選んだプログラムでは, Step2 から Step3 の APB, Step3 から Step4 の APB, Step4 から Step5 の APB の影響が高まることが期待された。実際にプログラムを実施した結果, これらの全ての影響が認められた。さらに, 間接いじめ加害につい

ては、プログラムの実施前では確認されなかった Step1 と Step2 の APB から抑制する影響が見られるようになった。このことから、APB に着目したことで、短期的なプログラムではあるが、いじめ加害をしないように認知のプロセスが変わったことが示唆された。

そして3点目に、本研究の教育的意義について考察をまとめた。本研究の教育的な意義は3つ考えられる。まず1つ目は、予防的にいじめに取り組むための方策を示唆したことが挙げられる。本研究の結果から、直接いじめの加害者も間接いじめの加害者も今回捉えた5つの能力全てないしは一部が低いことが示された。これは逆に考えると、実態把握調査をして、その結果いじめ加害や被害の報告がなかったとしても、能力が低ければ今後いじめ加害をしてしまう可能性があるということである。そのため、いじめの実態把握調査などをする際に、今回の5つの能力も調査することで、どこに課題があるか、何を育むべきかが明確となり、能力を伸ばす取り組みをするなど、いじめ予防に務めることができると考えられる。2つ目は、予防的に取り組む際の支援の方法として、1つの能力だけでなく、プロセスに着目することの重要性を示唆した点が挙げられる。単純にどこかの能力が低いと1つだけに着目するのではなく、いじめ加害に影響を与える能力、その能力に影響を与える能力、とプロセスを意識することで、効果的かつ段階的に能力育成をすることができる。例えば、直接いじめ加害へは社会的スキル能力が抑制要因として働き、さらにこの社会的スキル能力へは、他者意識、視点取得、友人親和動機的能力がそれぞれ影響すると考えられる。そのため、まずは、他者意識、視点取得、友人親和動機が高まるように支援し、それらが社会的スキル能力とそれぞれつながるように育成する。例えば SST などのスキルトレーニングを実施する際でも、児童生徒の実態に合わせて、他者意識や視点取得ができるようになることで、友人親和動機が高まり、より望ましい社会的行動案を提示することでその行動案を学びやすくするように、それぞれの能力のつながりを意識した支援の重要性が示唆された。3つ目は、いじめの問題に対して、いじめの有無だけでなく、その前段階の能力も踏まえて児童生徒を評価することで、問題志向ではなく解決志向になるということである。つまり、これまでのいじめの有無で評価していた状態から、影響を与える能力やプロセスはどうかと、アプローチする視点が明確になり、建設的に児童生徒を評価できるようになると考えられる。また、いじめ加害者への指導において、単に罰するのではなく、どこの能力やどこのプロセスに課題があるのかという視点で関わろうとする視点で向き合うことができるという点でも、いじめ加害者への指導がより建設的に解決指向的になれると考えられる。

そして最後の4点目に、本研究の課題と展望について考察をまとめた。本研究の課題として、信頼性の課題と文献研究や実践研究では十分に明らかにできなかった課題が挙げられる。信頼性に関しては、既存の尺度を用いたことによる限界性がその要因の一つとして考えられる。この点は、APB 間の影響をより正確に捉えるために、場面想定法などで尋ねることが望ましいが、そのためには今後信頼性のある尺度の開発が必要になる。また、サンプル数を増やすことによってデータの信頼性を高めることも今後の課題である。加害群のサンプル数が増えることで、より正確な影響関係が見えてくることが期待される。そのためには、サンプル数を十分確保するための大

規模な調査や、加害群をあらかじめ教師評定などで抽出して行う方法が考えられる。また、今回の文献研究・実践研究ではまだ明らかとされていない課題がいくつか浮き彫りとなった。まず、直接いじめ加害に負の影響を与える APB が確認されなかったことである。これは、今回着目した SIP モデルだけでは捉えられない概念なのかもしれないが、既存の理論、特に怒りや衝動との関連や規範意識などとの関連から理解を深めていく必要があると考えられる。また、本研究は SIP モデルの観点から APB の影響のプロセスに着目したが、プログラム前後での変化の要因については強く言及できていない。この点について、今回は量的なデータにとどまったが、今後は、質的なデータも収集し、いじめ加害者の SIP モデルから見た能力の変容過程にはどういった要因が影響するかを検討することも今後の課題として考えられる。さらに、いじめ防止プログラムを概観し、実際に効果検証もした結果から、実効性のあるいじめ防止プログラムが不十分であることが課題としてあげられる。この課題に対しては、いじめ防止プログラムを開発する際やその効果を検証する際に、今回用いた SIP モデルの観点や APB の観点などから、いじめ防止に影響を与える要因やプロセスを丁寧に見ていく必要がある。